

# 秘密結社の意識論述

郭 瑩

いわゆる秘密結社の意識とは秘密結社成員の一定の、あるいは大体一致した意識の傾向のことである。この種の意識の傾向は秘密結社の生存の仕組みを基礎とし、その成員の文化の伝承過程で形成した心理的素質と人格的特徴の制約を受け、その成員の思考様式と行為の準則を深く支配し、よって秘密結社の独特の文化体系を作り上げている。

秘密結社の意識は秘密結社の文化体系の中心的構成物である。それはその成員の共同の心理意識を集中的に現しているだけでなく、秘密結社の文化の特殊な本質を直接に明らかにしている。

社会の副文化群であるので、一面では、秘密結社は情感でも、価値観でも、生活様式ないし行為モデルでも当然、社会の主文化群と大いに隔たっている。これにより特殊な

価値観、行為規範を含んだ集団思想（または集団哲学）を形成し、この種の集団思想でもってその集団の人物の行為を支配し、彼らの共通の心理と帰属心理を育てている。秘密結社の意識はよって自身の独自性を持ち、ある程度主流の文化と相外れた傾向を表現している。他面では、社会の主文化群と同一の文化生態の背景のもとで共生する秘密結社は、また社会の主流の意識の中の思想的素材を大量に借用し、それは下層文化の屈折と変形を経た主流文化の観念を、さらに取捨止揚し、変換改造して、新しい系統的意義を付与しているので、秘密結社の意識に雑ばくな、変異した特徴を現している。

秘密結社の意識は、複雑な心理的体系である。けれどもその主要な性格について言うならば、おおむね五つの面に

表せる。「義を結んで、徒党を組む」結盟意識、「義」を核心とする仲間の倫理、「香主に孝行する」「結社内では師に従う」という秘密結社の信条、社会と対抗するきまりに制約されない心理、力を持たんで激しく争う、命知らずの勇を尊ぶ観念。

## 一 「義を結んで、徒党を組む」仲間意識

咸豐元年、黄兆麟という給事中が朝廷に提出した上奏文の中で、江南の秘密結社の活動の状況を記した時に以下のように述べている。

その平日の行為は、みな水滸という書物を主要なものとし、おおむね義を結んで徒党を組んで豪傑とし……ここで、黄兆麟は予期せずして秘密結社の最も基礎的な内容を指摘している。すなわち「義を結んで、徒党を組む」仲間意識、あるいは結盟意識である。中国社会で盛んなセクト主義、派閥思想と郷土観念などの社会意識が、この種の思想観念の広大な背景である。

中国は古くから小農経済の機構と地域が隔離されている状態を備えているので、中国社会は歴代セクト主義、派閥思想および郷土観念が盛んであり、朝廷の中の朋党、商業の中の同業組合である行や幫、下層社会の中の各種の秘密結社、小集団はすべてこれらの思想観念の表現である。

中国では、徒党を組んでの派閥意識のはじまりは大変に早い。春秋戦国時代、個人が士を養うことが風潮となり、孟嘗、平原、春申、信陵の「四君子」が、特殊な技能を持っている輩を網羅したのは、実際は徒党を組んで、自己の社会的勢力を樹立したのである。春秋戦国以後、この類の史事はよく見られることで珍しくない。袁紹が「下士にへりくだり」、劉備が「豪侠の少年と交わりを結ぶことを好み」、「水滸伝」の中の晁蓋が「もっぱら天下の好漢とグループを作るをことを愛した」。その実質もすべて個人の勢力を結集し、共同の利益を備えた「仲間」、あるいは「派閥」を作ることであり、その政治的野心は否認すべくもない。

一般の民衆も徒党を組むことについて決して疎遠ではない。「家にあつては父母に頼り、門を出ては朋友に頼る」という言い方は、外で一人の時は朋友に頼り、集団を結成する必要性を直接に暗示している。義兄弟の契りを結ぶことや、徒党を組むことは、よって社会では流行して衰えない。もちろん、下層の民衆の徒党を組むことは、互助の意味が含まれている。これに対しては細心の分析を加えなければならぬ。

伝統的派閥意識が生まれてくる重要な原因は、社会に公正さ、競争の仕組みが欠けているからであり、伝統的中国社会ではこの種の成熟した仕組みが備わっていなかった。そのため都市に入った移住民が精神的と物質的に困難な境

遇に陥った時に自然と、天下を論じ、世間の義侠心を重んじる派閥を結成し、生存と発展を求めようとする。たとえば嘉慶三年、龍岩の人張管来は福建省建陽県で「貧苦のため過ごしにくいので、人を糾合して会に入り」、契りを結んだと声明すると「一人に愚弄されなくなることが」可能になった。嘉慶七年福建省永定県で張配昌などの人が相談して和議会の契りを結び、相互に徒党を組んで、「お互いに援助し、人に欺かれなことが可能になった」と言い立てた。

道光一三年、李江泗などの人が福建省邵武県で保家会を唱え始めた。その動機は「今よその土地に居住しているので、人を糾合して会を作り、人に侮られないようにする」<sup>③</sup>。これらによって派閥が発生してくる最も基本的な動因を見ることができ、実際の行動の中では、この種の徒党を組む活動は確かに、「土地もなく、妻子もない」移住民に家族にならった感情的拠り所を有効に提供する。たとえば洪門と清幫にはともにいわゆる「身内の人」「家の人」の言い方があり、一旦移住民が「身内の人」あるいは「家の人」の集団に入れば、精神的かつ物質的に落ち着く所がある。清幫のスローガンは「飯あればみなが食べ、服あればみなが着て、福あればともに享受し、難あればともにあたる」。洪門のスローガンは「洪門に入ってから、兄弟が相顧みて、艱難は相助け」。崔錫麟は「私が知っている清洪幫」という文章の中で以下のように述べている。「清幫の最も主要な秘密は

『三幫九代』<sup>④</sup>である。これは絶対秘密の暗号であり……あなたがもし暗号の答え方が合えば、埠頭の大爺はあなたが身内の人と知り、すぐさま礼をもって相対し、あなたに三日の食と宿を接待し、別れに臨んでさらに次の埠頭までの路銀を送る。これは幫の兄弟が困難な時に埠頭に足を運んで仕事をすることなしに飯にありつく重要な宝物であり、したがって入会した時に、師父が『三幫九代』を弟子に配布する時には弟子に対して、これは『終身の飯のたね』だと言う<sup>⑤</sup>。洪門にも「今日洪家の飯を食べたなら、天下を歩いても憂いがない」との言い方がある。

上述の記録が生きて表しているように、秘密結社はその成員にとつては、自己の「経済的生存」を維持する「共同の利益」組織であり、徒党を組んで互助を行い生存できることは、彼らが結社で飯を食べる第一の重要な意義である。したがって団体の発展および壮大になることは自身の命運と密接な関係があり、よって各成員はみな個人の利益を秘密結社の利益と緊密に関係させ、仲間意識はさらに自覚的になる。

これらによってわれわれは以下のことを明にすることは難しくない。いわゆる派閥意識の核心は、各派閥の成員の命運に密接な関係がある派閥の利益である。この種の派閥意識がひとたび形成されれば、強烈な排他性と小集団の気持、すなわち派閥内部に対しては無原則な一体感と庇護

を、外部に対しては非理性的な排斥と敵意を抱くことをあらわす。これらがまさしく派閥意識の実質的な構成物である。

これに少し留意することを加えると、われわれはまた以下のことも発見する。秘密結社の組織機構は比較的ゆるやかで、各秘密結社内の分派は多くあり山堂が林立し、おのおのが小地域で覇を唱え、互いに統括や隸属せず、互いに指揮管轄せず、おのおのが首領を中心として、實際上それぞれ個々にさらに狭い利益集団と派閥の縄張りを形成する。たとえば早期における清帮の食糧運搬船の派閥組織は、翁錢、潘の三祖の名の下に、三つの大きな派閥に分かれ、その下に省、府、県の本籍により若干の小派閥に分かれ、一二八のグループと称した。各派閥ごとにすべてそれぞれの老堂船<sup>⑤</sup>があり首領がいて「領幫当家」と称した。一方天地会、哥老会の下に山堂は、その数を数えられないほどであり、まったく結社の中に結社がある状態である。

事情を知る人が秘密結社の各山の間の関係を以下のように評論叙述している。

表面は一つの秘密結社でも実際は各山には各山の兄弟がいる。たとえば五龍山は興龍山の兄弟を統括できない。彼らは経済的なことでは往来してよいが、行動ではそれぞれ事を行い、互いに干渉しない。たとえば五龍山の人が外部で何かめごとを起こしたら、責任

は五龍山の人が悪い、他の山には関係ない。要するに、各山はただ各山の兄弟を統括できるだけであり、責任はそれぞれが悪い、各地にはすべて責任者がいる。<sup>⑥</sup>

秘密結社の縄張り、埠頭、派閥にはみなそれぞれの利益がある。秘密結社の成員についていうならば、かれらはまず自己のいる縄張りや派閥の利益共同体の成員であり、小さな縄張りの利益はすべてのものより高いのである。それぞれの小集団の利益を擁護し、争奪するために、秘密結社の成員は一般に自発的に命がけて尽力する。事実、各秘密結社の間、秘密結社の分派の間の闘争、排斥はかつてやめられなかった。仲違いをし、凶器を持つての集団での争いをし、殴り込みをかけるなどのことが秘密結社の歴史ではしばしば多く見られた。陶成章がかつて考証して「各山堂が分かれて対峙し、相統一していないので、常にまた凶器を持つての集団での争いの行動がある」と述べている。<sup>⑦</sup>

たとえば清末の四川の「永寧の秘密結社は二大派閥に分かれ、成会と義会という。両派は水と火のように相容れず、常に数百人から千人で凶器を持つての集団での争いをし、俗に鬪龍と称した。……おのおのは凶器を持つて駆けつけ、相手に出会うと攻撃した」<sup>⑧</sup>。

各派閥の間の争いは、時にはひどいものになると大変残酷な手段を用いることがある。たとえば道光五年（一八二五年）、清帮の内部で新しい船の争奪により、派閥間の凶器を

持つての集団での凄惨な争いが発生した。各派閥はみな新しい船を得ることを希望していた。もともと老安嘉白幫に属する四艘の新しい船が、潘安幫に早い者勝ちで奪われ、凶悪な闘いの幕が開いた。義憤に満ちあふれた老安幫の水夫百余人は、浙江省嘉興に停まっていた潘安幫の水夫に不意に襲撃を加え、潘安幫に宿怨を持つていた杭三幫老安も凶器を持つての集団での争いに加わった。潘安幫と老安の二つの派閥の水夫は、顔にそれぞれ赤色または黒色を塗って目印とし、手に凶器を持ちお互いの殺し合いを昼夜ぶつ通して四日持続した。凶器を持つての集団での争いの場面は大変恐ろしいもので、ある者は手足を切断され、ある者は運河の中に放り込まれ、死傷者は数百人の多きに達し鮮血が運河や食糧運搬船を赤く染め、そのむごたらしさは見るに忍びなかった。

河に沿った各埠頭の秘密結社の間でも常に「埠頭を攻撃する」方式で、利益をめぐる争いを解決する。いわゆる「埠頭を攻撃する」は、埠頭での派閥間の殴り合いである。旧中国では、埠頭があるところではどこでも「埠頭を攻撃する」があり、結局どれほどの「埠頭を攻撃する」が発生したかは、全面的に調査することが難しい。漢口埠頭を例とすると、わずかに一九四七年の「漢口市埠頭紛糾事件」の統計だけで、一年間で喧嘩して殴り合うことが計九六五回起こり、平均して毎日二・六回起きているが、これは大い

に縮小された官側の数字である。一部の大規模な埠頭での凶器を持つての集団での争いは、参加人数が数百から数千に達した。各派は凶器を持つての集団での争いの前に、往々にして「死のくじを引く」方式を用いて、あらかじめ先に自派の中の「殺される」対象（この人は家族が面倒を見られ保護し養われることの承諾を得る）を確定し、その後「死人」を用いて訴訟に勝って埠頭を得る。なぜならば「訴訟に勝つには、殺される人が必要だからである」。

多くの秘密結社の成員が派閥の利益のために身を顧みず体をはって、極端な場合には生命の危険を冒し、飯の種を保つ本能的な衝動を持ち、とりわけ派閥観念の駆り立てる力を体现している。

秘密結社はきまりに制約されない文化組織であり、その生存と発展は外部社会の巨大な圧力を受け、この種の圧力は秘密結社内部の凝集力をさらに促進し、秘密結社成員の特殊な心理的拘束を作り出す。「義」を核とする仲間の倫理がこの基礎の上に生まれてくる。

## 二 「義」を核とする仲間の倫理

かりに中国の伝統的な宗法制的倫理の核心が「孝」であり、国家の君臣関係の倫理の核心が「忠」というならば、秘密結社文化の倫理の核心は「義」である。

秘密結社の早期の形態——天地会の発端より、「義」は種々様々な秘密結社組織の宣言と綱領の中で非常に顕著な地位を占めている。

乾隆末年の天地会の義兄弟の誓約書や誓詞の中で以下のようにいつている。「もとは異姓であるが、契りを結んで同じ洪となり、生まれは共通の父ではないが、義は実の兄弟がともに乳を飲んだよりも勝る」。

嘉慶・道光年間、各地の天地会は義兄弟の契りを結んだ時に、義侠心でもって相約した。たとえば、

「忠あり義あれば橋の下を過ぎ、忠なく義なければ剣の下に亡ぶ」(福建)

「忠あり義あれば剣の前を過ぎ、忠なく義なければ刀の下に亡ぶ」(広東)

「忠あり義あれば机の下を過ぎ、忠なく義なければ刀の下に亡ぶ」(広西)

「忠あり義あれば刀の下を過ぎ、忠なく義なければ刀の下に亡ぶ」(湖南)

入会の成員は「橋」(布で塔状につくる「筆者註」)の下、剣の下、机の下、刀の下に入り込み、自分が忠義な男であることを表明するのみならず、今後忠義をもって宗旨とすることを決意していることを表す。

洪門の「義侠心を尊崇する」では、契りを結ぶ時に古人にならって三本半の線香を焚く。最初の線香は、羊角哀、

左伯桃<sup>⑦</sup>にならって生死の交わりを結ぶ。二本目の線香は、桃園三結義にならって、同年同月同日に生まれるのを望まないが、同年同月同日に死ぬことを望む。三本目の線香は梁山の一〇八人の将にならう。半分の線香は、単雄信が唐に投ぜず、秦瓊が泣いたことを留める<sup>⑧</sup>。

清(青)幫のスローガンは「義侠心で団結し、互いに助け合う」である。

要するに、いかなる秘密結社でも、血をすすって盟約し、祖先三代の履歴や氏名および本人の生年月日などの書き物を交換し義兄弟の契りを結び、「義」の字を語らないものはない。「三国演義」の虚構の「桃園三結義」が秘密結社の契りを結ぶモデルとなり、関羽を拝み、関帝廟を拝むことは秘密結社の文化中のさらに重要な活動である。たとえば嘉慶年間の天地会の模様入りの書き物は以下のように述べている。「古より忠義兼備なるは、いまだ関聖帝君に過ぎる者無しと称せられる。それ桃園決議に遡りて以来、兄弟はあたたかも肉親の兄弟のように、艱難はともに気に懸け、疾病はともに助け、忠誠の芳名は、今に至ってもやまない。帝の忠義を敬い、ひそかに名を使つて集会する<sup>⑨</sup>。四川の袍哥は「義は桃園にならい」、毎年陰曆五月一三日すなわち関聖帝君の誕生日に必ず関帝廟で集会し、「單刀会」と称す。上海の閩社会組織の領袖の黄金榮も関帝廟の前で線香を焚ぎ爆竹を鳴らし、丁順華、程子卿と金蘭義兄弟となつて、禍

福をともし、生死の心を合わせると言った。

義は、中国古代の重要な道徳的原理であり、あるいは徳をもつて基礎とする行為の基準であると言える。『易経』では、「物を利してもつて義を和するに足り、貞固にしてもつて事に幹たるに足る」と言っている。『疏』の解釈では「天は万物に利益することができ、物それぞれをしてその宜しきを得させることをいう」と言っている。『書経』でも「義なるものは、心の裁制なり。義をもつて事を制すればすなわち事その宜しきを得る」と考えている。孔子は「君子は義をもつて上となし」、義なければすなわち乱れ、「君子は義を喻る」。孟子は「義は、人の正道なり」と言っている。

他に『中庸』では孔子の話も引用して「義なるものは、宜なり」と言っている。朱熹は『四書集注』の中で解釈して「宜なるものは事理を区別し、それぞれ宜しきところあるなり」と言っている。胡適もまた後にさらに簡単平明で通俗的な表現をして、「宜はすなわちすべきであり、すべてこのようにすべきことであり、すなわち『義』である」と言っている。

「義」は道徳の尺度となり、異なる価値観から出発し、内包は一致していないのである。正統的社会の中では、「義」は主要には目上と目下の序列を守る道徳的行為を表現している。管子、商鞅は義は「四つの根本」の一つであると考え、義を解釈して、忠、孝、礼、別とした。「いわゆる義な

るものは、家臣の忠であり、子供の孝であり、長幼礼あり、男女別あり」。『礼記』中庸篇では、「義なるものは宜であり、賢を尊ぶは大である」と述べている。韓非子の解説はさらに詳しく「義なるものは、君臣上下の事、父子貴賤の差なり、懇意な朋友の接なり、親疎内外の分なり。臣が君に仕えるは宜、下が上をしのぶは宜、子が父に仕えるは宜、賤しきが貴きを敬うは宜、懇意な朋友が相助けるも宜、親しきものを内にして疎きものを外にするは宜」としている。董仲舒は、仁義と天道を結合し、仁、義、礼、智、信を「五常」と称した。要するに「家臣の礼を失わず、君臣の位を壊さない」ことが、義の当然やらねばならない目標である。

世間でも十分に義を尊び、「世間では至る所で義を先にする」という言い方があり、「義」の世間の道徳上の地位を見ることができ。けれども、正統道徳を軽視する世間では、おのずから個性を備えた価値要求がある。その一は、弱小者に同情し、貧困者を援助し、義侠心を発揮し、人の危難を救い、弱きを助け強気をくじき、および恩を受ければ必ず報い、恩を施して報いを考えず等々の内容の「俠義」である。その二は、朋友を重んじ、兄弟を重んじ、誓詞を守り、終始変わらず、艱難はともに気に懸け、疾病は相助け、および財産を考えず、生死を考えず、血のつながりのある直系親属を考えないことを全兄弟の道とする等々の内容の「忠義」である（封建的な綱常の「忠義」は忠をもつて義と

し、忠は君に忠であり、義は君臣の大義である。世間や民間の「忠義」は、盟約に忠であり、朋友の義に忠であるに変異している。

世間の「俠義」は、民間に広く伝えられもてはやされている秦以前の俠士が基を開いたものであり、唐の李徳裕は『豪俠論』を書き、「義は俠と立たざるにあらず、俠は義と成らざるにあらず」という観点を提出した。秦漢以来、大統一の秩序が日増しに堅固となり、職業身分によって在野社会に住居する庶民の俠はだんだんと減びていったが、彼らの性格によって表現し精製した俠義の観念は文化となり、中国古代の下層社会の中で長きにわたっての発展と伝播をした。

世間の「忠義」は、名声赫赫として中国の庶民の崇拜を深く受けている関公と義で梁山に集まった好漢を化身とし、とりわけ「比類の無い義」と称せられる関羽は、朋友に忠で、桃園の盟を忘れず、艱難とともにし、生死相従い、「いわず一命を投げ出して知己に報い、千年にわたって義の名を仰がせ」て「忠義」の典型となるにたえている。才人によって描かれたこれらの架空の忠義の話は、『三国演义』と『水滸伝』という民間にきわめて広範に流伝した二冊の小説により言い広められ、民間の秘密結社に伝承されて風習になった直接のモデルとなった。

世間の重視する「義」は、その中に正統の道徳的価値と

は大いに隔たりがある平民意識、平等観念および公平意識が浸透しており、これまさしく世間の「義」と朝廷の「義」の異なるところである。たとえば朝廷の「義」は、目上と目下の序列があり、上下別ありをもつて天の道とし、世間の「義」は富者の財貨を奪って貧者を救い、義憤に燃えて助太刀するをもつて「天に替わりて道を行う」としており、両者の価値観の背離は言わなくても明らかである。

秘密結社は世間の組織であり、たいていは上述した「俠義」と「忠義」の価値範疇、行為、世間の義が行われている。秘密結社の倫理となっている「義」が、その意に含んでいるのは多層的である。その最高ランクは天理正義と説明できる。いわゆる「天に替わりて道を行う」、「義を重んじ財を軽んじる」、「富者の財貨を奪って貧者を救う」、「暴虐を取り除き善良な民を安んじる」、「義侠心を発揮する」等々が、すべてこの最高ランクの倫理道徳に属する。天地会の反清、洪門などの秘密結社の孫中山の革命への支持、黄金榮と杜月笙が日本人が上海を占領していた期間に日本人への協力を拒否し、一人は門を閉めて出ず、一人は香港へ行ったことなどは、その中には民族意識が発揮されたことが無くはないが、さらに深い心理的メカニズムでは、自己の行為が天理正義に合っていることを現していることにある。たとえば天津の「混混児」は、「ただもうけをしたり、非道横暴なことをする」けれども、「地方の公益にめぐりあえば、



時には義を見て勇み、人や金を出し、かつ強きをくじき弱きを助け、義憤に燃えて助太刀する<sup>(15)</sup>。近代の著名な天津キリスト教事件の交渉の中で、フランス、イギリス、アメリカなどの国は連携して、清政府に損害の賠償を要求するほかに、さらに中国にせまって下手人を引き渡させようとし、「そうしなければ世界を敵とする立場に中国を陥らせるだろう<sup>(16)</sup>」。この情況下で、はげの崔、足の悪い馮、馬宏亮などの一六名の混混児は「身を捨てて難を救うことを願った」。かれらが義のために死ぬことは民族意識を現しているとともに、さらに凜然とした義侠心の面目も備えており、当時の人は目して「義士」とした。史書は、一六名の義士が西関に護送されて処刑される時に通った街路上では、道に沿った商店、住民が香炉・燭台・供物などを載せる机、供物を並べて祭りになり、何千何万という群衆がやって来てこれらの慷慨激昂した義士を見送ったと、記載している。天津で広く流伝した快板書「火が河楼を焼く」では、生き生きしたタッチで義士が刑場に赴く時の豪壮な気概を描写している。

はげの崔、馬宏亮の年長者が前を行き、足の悪い馮が後にいて、十数名の英雄が一对になって前へ進んだ。……頭には立派な帽子をかぶり、揺れ動く花の刺繍のある球、……鼓楼を過ぎ鎮台の役所の入り口に着いた。英雄達は口汚く罵倒した。「悪い役人は外国人を見るこ

とまるで猫を避ける鼠のようだ。何としても天津を守ろうとした兄弟達が毛唐に命を償っても、事の起こりを問わない、……悪い役人がやるいいことというやつはこんなもので、本当に恥ずかしいか！……われわれは一に馬賊ではない、二に反逆者ではない、三に財を奪い取ろうとして生命に害を与えたり、押し入り強盗をしたのではない。われわれはあの無実なことのために横死した子供に替わって仇を討ったのだ。天津の大きな害を除き、豊大業を打ち殺し、毛唐の楼を焼き、……立派な人間なら自分のやったことは自分で責任を負うものであり、一命は一命で償い、死んだならば終わりにする！<sup>(17)</sup>」

秘密結社内部では、「義」はさらに重要な効用がある。これはすなわち秘密結社の倫理関係の紐帯となっていることである。その要は二点ある。

一つは秘密結社の成員の間では、「忠実な心の義侠心」でもって相対し、互いに忠であり義であらねばならないことである。秘密結社の文化の中では、忠は義の修飾語であり、ここで強調しているのは、秘密結社の成員の互助である。

天地会は「忠義堂の前に大小なし」と標榜し、お互いにみな兄弟と称したが、兄弟の義の内容はその誓いの中に入れている。現存するいくつかの早期の天地会の結盟の誓詞の中で、主要な内容は、結盟後は必ず兄弟の義を遵守

しなければないことを重んじている。乾隆五二年清政府が台湾で獲得した「天地会の義兄弟の誓約書の誓詞」では以下のように言っている。

今夜血をすすつて盟約を結び義兄弟となり、実の兄弟となり、永く異心なし。今同盟者の姓名を左に書き出す。ももとは異姓であるが契りを結び、すべての洪姓の人が生まれた時は共通の父ではないが、義は実の兄弟がともに乳を飲んだよりも勝り、管、鮑の忠、劉、閔、張が義を行った如くである。今より同盟した後には、以前個人的な怨恨があつても、すべて川や海に流し、さらに和睦する。善あればともに勧め、過失あればともに諫め、急場は助け合い、困ったことは助け合い、われら兄弟、規律に従い法を守り、勢力を借りて冒したり、強きを持んで弱きを欺いたり、凶悪な悪事をしたり、ことさらに誓約に違つたりしてはならない。自分のしたことは自分で責任を負い、多くの人に累を及ぼしてはならず、もし忠でなく義でなく（以下欠）。

嘉慶一一年に発見された「天地会首領盧盛海などの結盟の誓約書」では以下のように言っている。

盟約してより後、兄弟の情は肉親と同じで、実の兄弟よりまさり、吉凶はお互いに相応じ、貴賤が共感し、……自ら言うに、あえて大をもつて小を圧したり、強

きをもつて弱きを欺いたりせず、兄弟の財産をだまして奪おうとたくらんだり、兄嫁を姦淫しようとしたりせず、戦いに臨んでしり込みしたり、公事を利用して私利を図ろうとしたりしない。誓約書のように実行しなければ、諸神が共に誅す。

嘉慶一四年に清政府が広西で搜索園獲した天地会の「桃園歌」は以下のように言っている。

契りを結んだその日から、実の肉親となり、永久に変わらず、一に父が生まれた所、一に母が養われた所のごとし。……私腹を肥やしてはならず、兄弟をだまして横領してはならず、賭博に金をかけすぎてはならない。兄弟の父母は、自己の父母であり、兄弟の妻は、わが兄嫁と互いに呼び合う。契りを結んで後、妻を託し、子を託し、かつ互いに分け隔てなく、兄弟の待遇をし、以前の恨みは心の中に覚えていてはならない。兄弟の危難があれば刀を抜いて救わねばならず、戦いに臨んでしり込みしてはならない。兄弟の父母に失礼があつてはならず、もし兄弟の父母に失礼があつたならば、大きな板で四〇打つ重い処罰をする。大をもつて小を圧してはならず、力づくで強要してはならない。神の監察の下で、兄弟は忠実な義侠心を持ち、いいことがあれば一緒に享受し、共同のことがあれば一緒に行わねばならず、そうすれば子孫は世の榮華を享受し、

幸福の帰すべきところあり。<sup>(18)</sup>

道光以後に出現した『洪門三六の誓い』は、秘密結社の成員間の兄弟の義についての規定はさらに具体的できめ細かくなつており、三六の誓いの中のまるまる三二の誓いは兄弟の義の各項の原則を論じている。たとえば以下のようなものである。「賭博場で、結社外の人と結託し、兄弟の金や財物をだまして横領してはならない」、「洪家の兄弟の妻妾を手なづけて妻としてはならず、またこれと姦通してはならない」、「兄弟の得た財物を欲しがったり、利益を分けようとしてはならない」、「強きを持んで弱きを欺き、親と争ひ親戚を独占してはならない」、他人のことをとやかく言つて問題を起こし、「兄弟を不和にしてはならず」、「また兄弟を嫌つて相手にしなかつたり」、「自己の兄弟の評判をくそみそにしてはならない」、「兄弟の困難にあえば、必ず相助けねばならない」、もし役所の人間が兄弟を捕らえたことを聞けば、「兄弟を救わねばならず」、「早く脱走できるようにする」、「兄弟が殺害されたり捕らわれたり、あういは長く外出して、残された妻や子女が頼るべき人がいなければ、必ず策を設けて援助しなければならない」、「もし兄弟が妻や子女を託したり、重要な事情があれば、誠意を尽くし全力で努力しなければならぬ」等々。「二一則」「十禁」「十刑」および「一八章の律書」などの結社の規則や家法中には、相応した懲戒処罰の条項もあり、規則違反の取り締ま

りの助けとなつてゐる。

哥老会は以下のことを強調している。「今日誼を結んで同じ袍哥となつて後、生死禍福は永く相ともにする」、「艱難禍福ともに担う。もし誰かがそれをひっくり返したなら、兄は誅せられ、弟は滅ぼされる!」「これより兄弟は信義に敦く、山堂の香水は永くその美名を後世に残す」。兄弟達に「仲間で睦まじく」「仁を行ひ義を尊び」「常に忠誠を抱き」、「永遠に心を同じくし」、「永遠に仲良くする」ことを要求し、そうでなければ「三刀六眼」「三振りの刀が股を突き通す刑罰」を行い許さない!

青幫の歌詞も結社内の義侠心による団結と互助を宣揚しており、その歌は以下のようなものである。

家を出て遠方に行つた先で殴られたなら、青幫の世話になる。

もし路銀が無くなつたなら、数千文が都合されてお前は故郷に戻る。

あるいはちよつとした訴訟に出くわしたなら、多くの人が分担金をだしてお前は法廷に行く。

じめじめした雨が連日続きお前を閉じ込めたなら、八、九日居ても構わない。

空から大雪が降り凍えそうなら、多くの人が金を出して衣服を作る。

二つは、秘密結社の各成員はみな誓詞を守らねばならず、

「ずっと変わらず」、異心を持つてならない。ここで強調しているのは成員個人の秘密結社全体に対する道徳的義務である。

秘密結社内で、誓詞を守らず、異心を持ち、極端な場合には「敵に内通する反逆心」を持ち、組織に背き、兄弟を売る行為は、仁でなく義でない行為と見なされる。羅爾綱の『天地会文獻録』は以下のことを載せている。天地会が血をすすって盟約する時いつも義兄弟となる儀式を行い、成員の頭が位牌の前に立ち、手には鋭利な刀を持ち、鶏（鳳凰と美称する）を斬って「忠でなく義でなければ、この鶏のようになる！」と宣言し、ならびに以下のような詩歌を朗誦吟詠する。

頭には赤い房をつけ足は地を踏み、この世では夜々鳴く。  
今晩爾をとらえて証明する。反逆内通はこの鶏のよう  
になると。

組織に背いた義でない人は、天の責めに遭うだけでなく、きびしい刑罰処罰を受けねばならない。「洪門三六の誓い」の第一の誓いは以下のように言っている。「もし誓いに背けば、五雷が誅滅す」。その他に結社外の人と結託し、兄弟を売ったならば均しく事情に応じて鞭打ち、拷問、耳の切断から死刑に至るまでに処す。袍哥の「黒十項」は以下のように言明している。「埠頭を売って落とし穴を掘って跳んだり」、「敵と結託した罪は逃れがたし」。

伝えられるところによれば、洪門、哥老会は均しく数字の忌み避けることがあり、それは洪門は「七」、哥老会は「四」と「七」である。これは以前かつてこれらの行行の中から「敵に通じる反逆」をした義でない人が出現し、反逆者を誅殺した後、会の中ではこれより「七」と「四」を言うことを忌み、「四拜」「七拜」を設けず、これにより会員に戒めをし、秘密結社の忠実な心の義についてなおざりでないことを表しているからである。

要するに、秘密結社内で「義」は公認の、最高の、必ずあまねく従わねばならない道徳的原則と行為の準則である。世間から混入した人は、その他の倫理道徳は重視しなくてもいいが、ただひとつ義侠心は重視しないことはできない。無論結社の成員は相互の間で生死相託し、さらに秘密結社の利益のために万死も辞せずで、みな「世間の義侠心」を頼みにしている。義を離れたり、義を重視しなければ、秘密結社の中で一日たりとも混じれない。秘密結社の成員が、その他の倫理範疇ではなく義をもって彼らの最高の信仰と行為の準則としているその原因は多面的である。

まず、小生産者の日常的意識の中で、同族、同郷、同姓の郷土意識と宗法意識がもともと甚だしく深い、ひとたび彼らが故郷を離れ、もともと身を置いていた血縁組織を離れて、よその土地や異郷に来ると、その生存の便のためには、朋友間の慰めいたわりと救援に頼らざるを得ない。

痛苦で困苦な情景の中で、人々の共同の利益は、かれらのもとから持っていた血統関係のある直系親族の意識を突破し、「信義忠誠」を主要内容とする集団の親和関係が、秘密結社の全体の成員がすべての心血を注ぐ問題となった。「義」は自然に秘密結社の倫理関係の中心となった。

その次に、秘密結社の成員の主体は破産した農民とルンペンであり、彼らは小さい時から「俠義」「義をもつて相助け」「忠義」を重要な内容とする大衆文化の中に浸っており、義によって梁山泊に集まった一〇八将、桃園で義兄弟の契りを結んだ劉、関、張は彼らの崇拜する精神的偶像である。父母に対しての孝、君子に対しての忠、朋友に対して義侠心を重んじることは、彼らがあまねく承諾し受け入れられる倫理準則となっている。ひとたび彼らが世間に出て、派閥を結成すると、世間の義侠心も自然に彼らが最も重視する気質となる。

最後に、秘密結社はきまりに制約されない社会組織であり、その維持と発展は制度上の保証で得られるのではなく、必ず全体の成員の身を顧みない奮闘と一致団結に頼らなければならない。義を秘密結社の最高の生活哲学とし、四方八方からやって来て、もともと血縁関係のない秘密結社の成員が血縁をまねた兄弟関係を樹立して、秘密結社の利益のためには後へは引かず献身する。これらすべてが、まさしく秘密結社の生存、発展の根本的保障である。

もちろん秘密結社の成員が信奉する世間の義侠心は、自身の利益という限界があり、ひとたび彼らの切実な利益を損なうようになると、彼らも同様に「信」でなく「義」でなくなり、そっぽを向いて相手にしない。このような生死をかけた恩と仇、手のひらを返したような人情の変わりやすいことのどたばた劇は、かつて何度も秘密結社の舞台の上で演じられた。この点については、われわれは十分に認識しなければならない。

### 三 「香主に孝行する」「結社内では師に従う」 という秘密結社の信条

義を倫理関係の核心とし、徒党を組んで、秘密結社として成立してきたこの結社は、強大な凝集力と制約力を備えた集団である。この凝集力と制約力は、「会内で飯が食える」という経済的利益と義侠心で助け合ふということの感化から来るだけではなく、秘密結社内部の世代・長幼の序列があり、ランクが整然としており、賞罰が与えられるという平衡がとれた体系から来る。この平衡がとれた体系を維持するものは、結社の祖師崇拜の基礎の上に形成された「香主に孝行する」「結社内では師に従う」という秘密結社の信条である。

秘密結社の歴史の記載から見れば、祖師を崇拜するのは

各入会者の必修の学課である。各秘密結社はみな祖師を恒常的に祭っており、各種の「祖に参る」「祖を祭る」「訓話」の儀式を行い、祖師崇拜の信念を強化している。たとえば青幫の祖師の家廟は杭州に設けてあり、広大な邸の部屋は合計九九室半あり、大きな邸の一五室の内に歴代の祖師の位牌を祭り、祖堂九室は翁・銭・潘の三祖の位牌を祭っていた。これらは永年にわたって祀られ、線香の火は絶えなかった。家廟の中に一幅の対聯があり、以下のように記されていた。「師の指教は千里に及ぶによりて、祖のきまりが五湖を揺り動かすを知る」、このように祖師が極めて崇拜を受けている地位にあることが見て取れる。

青幫の中には「祖師自らの訓辞」があり、青幫の各成員はほとんどみな以下のような教誨を聞かねばならなかった。

爾ら後生に言葉で示す、注意深くはつきりと聞け、わが道の宗旨は、信義を尊ぶ、三つが最上である、枝葉は同根であり、親疎遠近、従来分けず、お前は今受戒したので、己を清くし身を修め、穏やかに事に処し、真心があり情が厚く人に接し、結社の規則は宜しく守るべし、国法に従うべし、祖訓に背くなかれ、祖恩を忘れるなかれ。

新成員が秘密結社に加入する時には、香堂で一連の「祖を呼ぶ」「祖に参る」儀式をもつばら行わねばならないが、これも秘密結社が祖師崇拜を強化する伝統的な行動である。

この面では青幫が最も典型的である。青幫で新入会員を採ることは「祖に孝行する」と呼ばれているが、小香堂には四海龍王の位牌、天地君親師の位牌と翁、銭、潘の三祖の位牌が置かれていた。大香堂に祭られている祖師の位牌には、天地龍王、歴代の仏祖、金祖、羅祖、陸祖、翁祖、銭祖、潘祖などがあつた。香堂に入つて後、まず目上の者が引率して三祖を呼び、伝道師が詩讀を朗誦する。

尖つた場所であつた膝を跪き、線香を焚き祖の列席を請う。五台、北海を渡り、壇に赴き遺した学を述べられよ。前祖、後祖を呼ぶそれぞれ専門の歌詞があり、その中で金祖を呼ぶ詞は以下のである。

青い海アオギリが鳳凰の毛を立て、祖師は明朝において道を開く。

清門の始祖が誰かは解らないが、子々孫々代々高し。羅祖を呼ぶ詞は以下のである。

羅祖はもともと伝道の仙人、明朝嘉靖の年に生まれる。回教の王を征服して功労大、千年万年線香の煙を受ける。

その後伝道師が引率して、線香を求め、蠟燭をつけ、祖に参る礼を行い、各順序ごとに均しく祖師を崇拜する色彩に満ちた詩讀を読まねばならなかった。祖に参るときの詩讀は以下のである。

お三方の祖師は中央に祭られ、三者四少に頂礼して参

る、

三跪九叩して輕率にすることを許さず、師父が祖堂に來られますことをご案内申し上げる。

祖に参りて後、本命師が新弟子に訓話をし、三替九代を拝む。最後は祖を送る儀式であり、全堂の三老四少に一緒に跪き、新弟子二人が蠟燭を捧げ、伝道師が以下の讃詩を読む。

祖師が仙山に戻るを恭しく送る、香堂の家礼はすでにやり終えた、

祖にお骨折りをかけてご来臨賜り壇にお降りいただいた、空に向かって祖に感謝し平地で跪く、

お三方の祖師は先頭を歩き、護法の若衆が後ろにいる、祖が雲を払い下を見れば、子や孫が笑っていて天を震わすを見る。

洪幫が新入会員を採る時も、香堂に歴代の祖師の位牌を祭らねばならず、まず紅旗で目印を掲げ、空中に向かって自己の祖師を呼び、転じて聖人の前の「位牌にすえて」、香炉に線香を入れ、再び聖人の前に向かって「開眼供養をする」。香堂の儀式が終わる前に、紅旗を焼いて「聖人の位牌を焼いて」「聖人を送る」とする。香堂の式ごとにすべて、祖師に向かって崇拜の情を表す「条語」がある。たとえばその中の「聖人を送る条」は以下のである。

喜びと笑いに満ちあふれ、私は五祖が極楽浄土に上る

を送る。

天神は今日天に帰り、地神はおのおの廟堂に帰るを請う。

線香・蠟燭・紙馬をともに焼いて、洪家の大変なめでたさを永く保つ。

聖人を送ることがすでに終わり、万事大吉である。園に満ちた兄弟は、三等級続けざまに昇級する。

祖師に対して頂礼を行うこととひれ伏して拝することは、祖師達が往事その結社を始めたからだけではなく、さらに祖師達が暗闇の中からすぐれた手柄や陰ながらの助けをして、弟子や孫弟子のために幸福をもたらし禍を取り除くからである。これは生活が常に不安定な状態で、心理的にも気持ちの上でも、超自然的な力の世話と慰めを必要とする秘密結社の成員に、精神的な拠り所を提供する。「顔を洗いい心を洗いまだ線香を焚き、線香の煙は遙か彼方の極楽を突き抜けていき、弟子は敬虔な心でお招き申し上げる、雲の上から武聖王を降臨させ、われわれ兄弟みなを保護されよ、福祿福寿福吉祥」この秘密結社の祖を祭る詩はまさしく秘密結社の成員が祖師に保護と幸福をもたらすことを求める心理の描写である。

祖師崇拜はすでに確立されて秘密結社の通則となっており、秘密結社の現実の倫理関係を処理する拠り所ともなっている。その実は、祖師崇拜が秘密結社内で推奨し重んじ

る原因を備えている。もとよりこれにかこつけて秘密結社成員の同一感と帰属意識を培養し、これにより散らばった砂のような秘密結社の成員に対して凝集力と求心力を形成させようとしている。さらに加えて直接的現実的的目的是、これによって秘密結社成員の秘密結社の首領（師長）に対する「一日師となれば、終生の父となる」式の服従と秘密結社の准家長的な統治の秩序を樹立するのであり、その核心は師父、「老頭子」、あるいは山主、大哥の絶対的な權威を樹立することである。これについて、各秘密結社は均しく明確な制度的に制約する規範がある。

天地会系統の秘密結社はおのおの山堂を立て、並列して発展するが、多くの山堂には多くの頭領がいて、それぞれの家族の大家長のようなものである。天地会は、香主に孝行することは、「親子兄弟父母の關係と同じで」、「分を越えてはならない思想である」。

哥老会は大哥に逆らう者に対して厳しい処罰を制定して、「怒った顔で兄を視て律を犯すの条」「平素兄の教えを聞かなければ、棍棒で四〇打ち皮膚や肉を焦がす」。

青幫はとりわけ師長の尊嚴を強調し、前代の字輩<sup>(2)</sup>の師父はすなわち家長であり、「師の弟子とならなければ、家中に入れない」。重んじているのは「青幫においては師に従う」ことである。結社の規則を「家規」と称し、「家規は祖師が議定するに係わり、……家規に従わなければ打ち殺しても

罪にならない」と主張する。十大家規の第一条は「師を欺いたり祖を滅ぼしてはならない」。これを註釈して以下のように述べている。「昔から言われているのは「師弟は父子のごとし」。師を欺くことはすなわち逆らうことで不孝であり、犯す者は重罰に処す」。「師を勢力を恃んで威圧する罪は極悪であり、祖を滅する過ちの罪は口にはできないほどだ」。第二条「師を軽視することを許さない」。第六条「引法を代跳することを許さない（『引法を代跳する』とは地位を得たり、あるいは出世して以後、自己の字輩が下であったり、あるいは師が明白な声望がないので、他の声望や勢力のある者に投じて、再び弟子入りすることを指す）。第七条「家規を擾乱するを許さず」、第八条「字輩が下の者が上の者に対して尊大となることを許さず」などは、均しく師を尊び祖に孝行することと關係がある。青幫はさらに弟子を採る際の「十大禁止」規定があり、内容は以下のようである。一人の弟子は二人の師に弟子入りするを許さず、父子が同一の師であることを許さず、師が死んでさらに師に弟子入りするを許さず、最後の弟子を採って再び採ることを許さず、弟子が師の弟子を採ることを許さず、師が此岸を過ぎて（亡くなること）代わりの師が弟子を採ることを許さず、香頭が低いので高い地位を狙うを許さず（勝手に字輩を高くするを許さないということ）等々。

これらによって、秘密結社の首領は秘密結社組織に対し



て思いのままにする権限と秘密結社が得た資源に対する支配権を獲得するだけではなく、弟子達に対する賞罰と奪ないしは生殺の大権を獲得した。首領は秘密結社のたましいと象徴であり、秘密結社内のすべてはみな首領の命を聞かねばならず、秘密結社の各成員はみな必ず首領を頼みとし、命を聞かねばならず、普通の成員は「大哥」、「龍頭大爺」、「師父」、「香主」、「山主」に対しての無条件の服従は当然と見なされ、いかなる反抗的行為、甚だしきは言葉の上での不従順も、逆らい不孝をしたと見なされ、結社内の私刑が行われる。たとえば雍正七年の「刑部咨文」の中では以下のように記載している。各結社の水夫は徒党を組んで後、「一にその『教主』（老頭）の指図により、縛って火であぶったり、耳を切り筋を切ったりし、いささかも忌憚なし」。嘉慶帝の劉把式はその弟子のおい趙玉に指図し、ささいなことを口実にして一名の水夫厳会生に対して私刑を行い、彼の左耳を切り落とさせた。道光五年江蘇巡撫陶澍の上奏した摺の中で以下のように言っている。「水夫がもめごとを起こすと、必ず老官（首領のこと）に送って処置し、軽ければ責任を問うて罰するが、重ければすぐさま殺し、河の中に沈める」。老官師匠がその秘密結社の弟子達に生殺与奪の権限を持っているのは疑いの余地のないところである。

このような伝承された気風は、最近まで衰えなかった。抗日戦争勝利後、天津の充双議成運送業の把頭で「四天王」

を称した青幫の頭目王家保の兄弟四人は、所属の労働者がその搾取が重く、賃金の支払いが滞っていることを抗議したので、六名の労働者を「手足を縛り、既に逆さに吊し、鞭と棍棒を交えて打ち、何度も気絶させた。労働者の親族が再三跪いて、言った二つのことは誓いを立てて悔い改めると願って、はじめて縛っていることが解かれ命が救われた」<sup>(3)</sup>。このように結社の頭目に服従する意識が、結社の成員達に対して束縛していることが甚だ深いことが見ることが出来る。

また秘密結社中の個人の位階は、資格と履歴、貢献、能力などの要素によって確定し、秘密結社の頭目は往々にして、超人的な度胸と知識、氣力、拔群の武功、計略、悪辣な手段および広範な社会関係などによって、秘密結社の中で権威を確立し、成員の中で強い呼びかける力と脅す力を備え、これによっても結社の成員の首領に対する畏敬と服従の心理を強化した。

指摘しなければならないことは、秘密結社成員の「師父」、「舵把子」、「大哥」、「香主」に対する「孝行」、「服従」の意識は、すべての中国の伝統的社会生活に浸透している宗法倫理の意識になお深く根を下ろしていることである。

中国の伝統文化の重要な特徴は濃厚な宗法倫理であり、この点の中国人の心理構造への影響は深遠である。西周以後、政治関係と血縁関係の高度に統一した宗法政治の情景

はすでに復せず、宋代の大消費都市の出現後、各個人の生活空間の中で真の家族生活が占める比率はだんだん下がっていったけれども、高度に理論化した宗法の倫理体系は、終始社会の整合の車軸である。この体系の影響の下で、皇帝は「君父」と呼ばれ、全社会は宗法による彼の大家庭であり、地方官は「父母官」と呼ばれて、「地方の「子民」の主人とならねばならず、「皇帝が各地に対して行う父権の支柱でもあった」。新しく生まれた社会組織の形式は家族ではないけれども、家族化が可能であり、血縁関係はないけれども、宗法化が可能である。家長制を核心とする社会生活は、各種の形式による依頼、あるいは随従の関係を形成し、子女の父母に、個人の家族に対するから、学生の教師に、徒弟の師父に、下級の上司に、使用人の主人に対するまで、……人々はみなある種の形式による依頼、あるいは随従の関係の中で生活し、個人が得たすべての実利的な恵みと利益は、ある種の恩のお陰と庇護によりもたらされたものであり、これにより中国人の根深く強固な宗法による恩に報いる心理を形成した。

秘密結社組織の実質を究めればやはり家族化、あるいは宗法化された社会組織であり、秘密結社の成員と頭目の間には実際上は依頼、あるいは随従の関係である。秘密結社の成員について論じれば、秘密結社に加入したからには衣食があるという実利的な恵みと頭目の庇護する安全を意味し

ており、たとえば四川の民衆のことわざに「風が大きな坂で吹けば、仕事は大哥に向かう」とあり、これは袍哥が首領の後盾があれば、「風雨を遮ること」ができることを意味しており、そうであるからには「恩に報いる」心理にもとづき、首領に服従し、孝行することは道理になつて無理なく彼らの信条になる。

#### 四 社会と対抗するきまりに 制約されない心理

血をすすって盟約を結び、兄弟の契りを結び、秘密結社化するなどきまりに制約されない方式で組織されたこのような結社は、きまりに制約されない社会集団である。秘密結社がきまりに制約されないことは、それらの内部に組織や規則がないことではなく、それらが合法的な社会文化の規範によつて組織されていないことを指すのである。秘密結社は正常な生産と交換活動の軌道の上で運営するのではなく、主要には密輸、略奪、阿片販売、集まつての賭博、売春の管理および店や市の利益を奪い合う、手をこまねいて手数料を取る、その場で贓品を分けるなどの不法活動によつて集財し、これによつて、それは生存のメカニズム上でも主要な社会機構と相対抗するのである。

秘密結社のきまりに制約されない品格がその成員の社会

と対抗するきまりに制約されない心理を決定した。秘密結社のきまりに制約されない文化的心理を典型的に現しているのは、隠語、暗号をその中含む秘密結社の秘密の交際連絡方式以上のものはない。

隠語、俗称黒話、暗語、切口は、その主要な効能は同類を識別し、情報を伝えることにある。洪門の隠語は『海底』に記載されており、その主要内容は埠頭を訪問し交わりを結んだり、梁山泊での根本問答であり、以下のようにである。始祖洪英の出身についての問答、酒を勧める用語、宝を送る（義侠心を論ずる）用語、山を出て友を訪れて交わりを結ぶ時に、四八の詩句で交わりを結ぶ、見送りの交わりを結ぶ、三本半の線香、門を出て交わりを結ぶ、宿屋の主人を尋問する、顔を洗って（または開眼供養と称す）交わりを結ぶ、陪堂（副官）の命令を伝える、五つの排（ラシク）の昇格を祝う、山崗令、刀で生け簪を斬ることを讀める、祭りの旗、命令を伝えて開山する、紅旗の安置、山を鎮める命令、客に接して安住させる、各ランクの兄弟に封贈する用語、会員証を大爺にお見せする等々。青幫の隠語は『通草』の中に記されているが、香堂を開く時すべて、新入会者は秘密の折り畳んだものをもらえて、中に青幫中での各種の尋問の術語があり、各人は十分に習熟するほど暗記して、流暢に反応するほどにならなければならず、「海底を尋問する」とは、青幫中で常に見られる隠語の往来で

ある。「袍哥」が世間を行き、埠頭を訪問するにも「要害の河の令」があり、外で通用している。

隠語以外に、秘密結社のさらに普遍的な交際連絡手段は、声を出さない暗号、すなわち手振りと茶陣である。手振りは書くことをせず、声をあげず、手足を挙げて、自家の兄弟と連絡し、友誼と援助を得ることができる。茶陣は急須、茶碗の置き方および茶や水の盛るのを一杯にしたり空にしたりを交替に行つて暗号にする。

隠語と暗号のきまりに制約されない点はこのあたりにあつて、すなわち社会全体の成員の交流は普遍的な社会文化規範の中で行われるものだが、隠語と暗号はかえつてこの文化規範に属せず、ただ特定の集団のみに属し、秘密結社が自己の生存を維持し発展するために創造した交際の道具である。隠語、切口、手振り、茶陣を学習してマスターすれば、一文無しでも天下をあまねく行くこともできるが、これに反して、もし切口に習熟せず、手振りが符合しなければ、ただ連絡と援助が得られないだけではなく、かえつて殺される禍を惹起する可能性がある。要するに、隠語と暗号はきまりに制約されない文化集団の産物であり、その発生は、また翻つてその集団の封鎖性と集団の人物に対する文化支配を強め、これによつて秘密結社の成員に社会と相容れないきまりに制約されない意識を強化した。

秘密結社が通常備えている無頼漢の意識もきまりに制約

されない文化的心理の重要な表現である。この種の無頼漢

の意識の発生は、まず秘密結社が遊民など社会の低層にいる群衆を主体としている組織状況と関連する。彼らの大多数は社会に傷つけられているので、このため、彼らの行為は往々にして社会に対して報復して鬱憤を晴らす心理を含んでいる。たとえば天津の一部の靴製造の労働者は、平時靴店のとがめ立てや難癖やいじめを受けていて、これ以上耐えられない時には、歯を噛み地団太を踏んで「仮小屋」に入り込み混混児となって、難癖をつけ喧嘩をしかけて報復し、特に靴屋に行き靴を買うことにかこつけて見本通りのものと言つてとがめ立てしてのさばり出し、もって「悔しさを晴らした」。一般的に言うところ、秘密結社に加入以後、長期にわたつて「世間をさすらう」ので、正常な経済生活と社会秩序の外に遊離して、失業労働者はしだいに純朴な本来の面目を失い、楽なことを喜んで労を厭い、強きを恃んで弱きをしいたげ、機会に乗じて巧妙に取り入り利益を得て、勞せずして得る無頼漢の悪習が繁殖し、東西南北に行き、四方八方で食べさせてもらう生活を求めた。陶成章は『教会源流考』の中でこれについて評論して以下のように述べている。

秘密結社の弊害は、団体を結成して、大きなものは人の財産を盗み取るようになってしまい、小さいものは小泥棒や、流浪する乞食になってしまい、要するに

みなこそ泥をやっているだけである。

その次に、秘密結社の無頼漢意識の発生と氾濫はさらに秘密結社の生存方式と密接に関連している。秘密結社の生存方式は一種の寄生方式であるので、この種の寄生的な方式の重要な特徴は、略奪的な手段でもって社会に対して彼らの生活を維持、ないし享楽に浪費する費用を提供することを強いることである。この点と無頼漢の生存術はべつに根本的な差異はない。彼ら自身の話を用いて述べるならば、結社に潜り込んで仲間と結んで「金を集めて分配し」「略奪して財物を得る」ことができ、いわゆる「生まれつきのごろつき（光棍）」は隙につけ込み、「隙はごろつき（光棍）」につけ込まれ、「隙は三分の罰も受けず」、「隙がなければ悪党を養うことができない」であるとし、明々白々、秘密結社の生存方式の不道德性と略奪性を悪びれもせず一般に述べている。事実、秘密結社が成立した初期から、各地方で多くの殴り合い、略奪、郷里を横行する、賭博場を開くなどの種々の不行跡を留めており、それは無頼漢の行為とまさにぴったり合うのである。この種の寄生的な生存方式の秘密結社成員に対する腐食性およびその反社会性は言わずとも明らかである。このため、彼らも随時「官に抵抗して捕縛を逃れようとする」、ないし「旗を立てて事を起こす」準備をしていると主張している。これは疑いもなく秘密結社のきまりに制約されない心理を大いに強めた。

これと同時に、秘密結社内に大量の無頼漢が入り込んだ。たとえば道光年間、漕運の「食糧運搬船が空で戻る時、多くの無籍の匪賊無頼が、水夫と結託し、「青」幫に従って南下し」、「武器こっそり隠し、凶行を演じてほしいままに乱し」、「旅客を略奪する事件がしばしば見え」、「住民商人でその害を隠れて受けるものは、実にどれほどか解らない」。嘉慶の時、江南の潁州府、亳州府、徐州府、河南の帰徳府、山東の曹州府、沂州府、兗州府一带には、「順刀会」、「虎尾鞭」、「義和团」、「八卦教」などの秘密結社があり、その参加者の多くは「無頼の悪党」である。清末、長沙の「青衣党」、沅江県の「黄巾党」は、均しく哥老会の残党であり、「無頼の徒の集合に過ぎないのである」。(26) 陳天華は『警世鐘』で、哥老会・三合会の中で、多くの人が「姦淫略奪の四字を図るに過ぎない」と言っている。これらの記載は、決して純粹に多くの偏見によるものではなく、確かに事実による拠り所があるのである。これらはともともと「平素の行いが遊びほうけていて、正業に務めない」遊民無頼が、秘密結社の勢力に頼って、悪いのに輪をかけてさらに凶悪さを加えたことは免れず、さらに秘密結社の無頼漢化と無頼漢の秘密結社化の趨勢を促進した。清末民初になると、秘密結社の無頼漢化と無頼漢の秘密結社化の趨勢は一步進んで強まり、錢可生は『上海黑幕滙編』で、当時「私の見るところでは、無頼漢で青幫に入らないものはほとんどない」

と言っている。これらの無頼漢はこれまで埠頭公口を開くことをもって、覇を唱えて一方で立脚生計の道を計る手段とし、「多人数を集めて詐欺行為をし」、言いがかりをつけて財物をゆすり取ることと強奪することでは、くろうとであつた。天津の「混混児」は、「ただ儲けをし、素手で魚を捕るようなこと」をし、その横暴無頼がよくわかる。故に、民国の時期になると、はつきりと「秘密結社無頼漢」の名称があつた。

すこぶる面白みのあることは、秘密結社の中の人々が意外にも堂々と「光棍」をもつて自称したことである。たとえば洪幫(哥老会)の成員は三ランクに分かれていて、「三ランクの光棍」と称した。

第一ランクの光棍は清水光棍と呼び、社会的に一定の学識、声望、地位のある人である。第二ランクの光棍は濁水光棍と呼び、武装力の人員であり、城を攻めたり、寨を下したり、家を攻撃し強奪したり、路を遮り財物をつかみ取ったり、夜間に倉庫に盗みに入ったりなどの手段で金や財を集める。第三ランクの光棍は金銭を納めて仲間になった光棍と呼び、ただ財物や糧食を出すだけの地主や大金持ちである。

考察によれば、「光棍」の一語は、元代に出現し、地回り無頼漢の類を呼ぶのに用いている。たとえば『元曲選・犬を殺して夫を諫める』の「楔子」の中で「二人の光棍を信

じていたのに、おいらの家を引き倒して毀した」とある。

明清時代、「光棍」という言い方はすこぶる流行し、無頼漢に対する官側の通称となり、明代の史籍の中でも「打光棍遊食の徒」と称したり、あるいは「打光棍の徒」「打光棍不良少年」と称し、「打光棍」と略称した。『大清律』の中では、「光棍の例」をもって無頼漢の罪を処置している。『皇明条法事類纂』の記載では、いわゆる「光棍」なる者について、一部の「凶悪の徒は、三、四人または四、五人ずつ群をなし、糧米を貯蔵しておく場所の米を出し入れするのに乗じて盗みをしたりふんだくったり、殴り合いして人を殺し、死体を担いで否認する」と、述べている。清の人の『俗語考原・光棍』は、解釈して「俗に言うには無頼の匪徒で、言いがかりをつけて財物をゆすり取ることに従事する者を光棍とする」と言っている。清代の『六部成語注解・刑部成語』も光棍は「騙る匪賊である」と述べている。齊如山先生は『北京土語』の中で以下のように解釈している。「およそ貧窮していてつまらないとし、人の金銭財物を無理に求め、人の利益をわがものにする者を、これを名付けて『光棍』という。その貧窮具合を言うに、一本の棍棒のようであり、棍棒に比べてさらに光〔無一物〕である。棍と名付けたからには、決して心優しいものではなく、硬いと形容するをもって、道理を重んじない人という。」「光棍」は以下の特徴を備えていることが見て取れる。財産がなく、

正当な職業がなく、無頼の習性があり、凶暴で道理を重んぜず、騙りなどの手段によって人の金銭財物を求めることによって生活する。

「光棍」の語には、さらに広く知られている意味、すなわち独身男がある。この意味は明の人がすでに使用しており、たとえば『孤本元明雜劇』中の明代の馮惟敏の『僧尼共犯』で以下のように言っている。「歡喜仏の男女の仏像は、代々相伝わり、仏教徒を成長させ、おれの弟子をだまして、みな光棍とする。」「俗語考原」はさらにはつきりと以下のように言っている。「今の風俗ではまた妻のない独り者を光棍漢という。何故に妻のない男を「光棍」と称するのであるうか？ 以下のように解釈するという人がいる。『棍』なるものは、男根である。ゆえに妻なき男を「光棍」と俗称する。大ざっぱに見れば、妻がない「光棍」は、無頼の「光棍」と関係がないようであるが、詳しく弁別し分析すればかえっていささか関係があるのである。というのは無頼の光棍は、財産がなく、また技芸もなく、何をもって家族を養い生活するのだろうか？ 大半はただ自己の眼前の楽しみを得さえすればいいのであり、かつ行為は世間の人に入られないものであり、誰が女子を彼の嫁にするだろうか？ 故にこの輩もまた多くが妻のない「光棍」である。妻がなければ、甚だしく気にかけることもなく、かえって我が輩光棍は、命を軽く扱うのも良し、ふてぶてしく構え

るも良し、後顧の憂いもない。お前のようなあのような家もあり家族もあるまともな人が私をどうするっていうのだ！これがすなわち無頼漢の光棍な性格である。

秘密結社の人はこのように世間の人が軽蔑し、無頼漢味十分な呼び方をもつて自負しており、彼らが無頼漢集團の生存方式と同じと認めることを表明するだけでなく、さらに秘密結社の成員の社会と対抗するきまりに制約されない心理と反逆の心理を、強烈に表している。この種の反逆心理から出発するので、秘密結社内部の言語通信系統の中で、「光棍」の称は社会の評価とはつきりと二つに分かれる全く新しい意味を賦与されている。『漢留全史』は以下のよう

に解説している。「少しも悪習に染まらないことを光といひ、真つ直ぐで曲がらないことを棍という。光は明であり、棍は直である。すなわち光明正直なことをいうのである。試みに観るに世間でどんな棍であろうと、誰でも直でなく、少しでも湾曲するころがあれば、これをステッキと称さず、これを杖という。どうしてこれを棍ということができようか！棍と命名し、さらに光というのは、正直光明でなければ駄目である」。洪門の『盤海底』の中で、「光棍皮という」ことについての応答があり、さらに「光棍」を非常にうまく、万能と描いている。

問…何を光棍皮とするか？ 答…光は、天にあつては日月であり、万国と中国全土を照らすことができ、地

にあつては珠寶宝石金銀であり、天下に通用でき、人にあつては目であり、世界の善悪を見ることができ。棍は、天にあつては娑羅<sup>サラス</sup>棍であり、地にあつては花蘇芳<sup>ハナズオウ</sup>棍であり、お互いにあつてはとぐろを巻いている龍棍である。皮は、天にあつては娑羅皮であり、地にあつては花蘇芳皮であり、人にあつては名譽である……

秘密結社の中の人は人相見・雑芸・香具師などをして世渡りし、同業者に接触すると、さらにいわゆる「光棍を求める」言葉があり、秘密結社の中で通用している俗語を用いて話をするが、その中ではまた「光棍」に対する自慢に満ちみちていた。たとえば「十年で状元<sup>ジョウエン</sup>の試験に受かるが、十年では光棍の試験には受からない」。「光棍は道理に合わない話をしない」。「光棍は負けん気を出す、財を争わない」。「光棍は仁を結び義兄弟の契りを結び、恨みを持った仇敵とならない」。「光棍は九九打つても、一を打つことを加えない」。「光棍は少しのヒントですぐ解る」。「光棍の腹の中には基準がある」。「むしろ光棍と喧嘩をしても、乞食とは話をしない」等々。

社会制度、道德、世論等々から来る有形無形の圧迫を受けているので、秘密結社はこの社会と反対の論調となる。人が邪悪と指摘することは、自分がかえって正義とみなし、人が分を安んじ己を守ろうとすると、自分がかえって殴打・破壊・略奪をするし、人が無頼で騙りであると言うと、自



分はかえって正直で光明であると言うし、人が凶悪の徒であると言うと、自分がかえって仁義の輩と言うし、人が「光棍」を蔑視すると、自分がかえって「光棍」をもって光榮とする。この種の心理状態は始終はつきりとあるいはぼんやりと秘密結社集團の思考と行為を支配しており、よって秘密結社の歴史に影響しており、われわれが秘密結社を分析する重要な鍵でもある。

さらに、秘密結社の無頼漢意識はやはり秘密結社の「義」をもって核心とする行為の準則とともに生まれ成長してきたのである。なぜならば、世間の義侠心を行為の準則、あるいは処世の哲学としているのは、主要には歴史上の浮浪者、無業者、俠客、世間の医師・魔術・神仙術などに通じている者、地回り、無頼漢および市井の子供などが発展させた文化意識であり、無頼漢や無産者の行動哲学である。これによって、ひとたび秘密結社の利益に必要となれば、秘密結社の成員は往々にして、「世間の義侠心」のために、是非や込み入った事情と社会の一般的規範を無視し、捨て鉢になり、社会に危害を与える。たとえば『洪門三六誓』は、以下のように規定している。「洪門に入つて後、洪家の兄弟は市の立つところ、町、劇場、寺社の土地で風仔（他人＝著者註）と喧嘩し、合図をすれば、すぐに前に行つて相助ける」<sup>(註)</sup>。きまりに制約されない文化的心理および無頼漢化の傾向が一步進んで発展すれば、秘密結社に大規模な組

織的犯罪を主要な標識とする闇社会集團への転化を直接に促進する。

## 五 力を持たんで激しく争う 命知らずの勇を尊ぶ觀念

道光一五年、清の皇帝は漕運をしている省の区域の各督撫および漕運總督への上諭の中で、漕運の水夫の秘密結社の中での永年来の「凶猛な風潮」をすこぶる懸念して以下のように述べている。

朕が聞くに、食糧運搬船の水夫の類はみな、原籍のない匪徒で性質は凶猛であり、……おのおのがグループに分かれ、数を持みにし強がつて、途中で互いに闘つたり、旅行者を強奪する事件が、しばしば見られる。……科道<sup>(註)</sup>の上奏によつて、しばしば勅諭や命令を漕運をしている省の区域および沿路の各督撫および漕運總督へ下し、厳しく査察させ、随時懲罰させることが再三にわたるが、なお凶猛な風潮は今に至つてもますます盛んである。そのわけの原因を追求すると、すべてこれらの匪徒は鼻っ柱が強くて法を恐れないことにより、たまたま重大事件があつて、調査して明らかになつて後、数人を処刑しても、これらの匪徒らはただいつもの通りと見なし、少しも戒めになつたり恐れたりせ



ず、積弊はほとんど改めがたい風潮となっている<sup>(30)</sup>。

道光帝の言うところは、実に秘密結社の意識のまた一面、すなわち秘密結社のきまりに制約されない風格と密接な関係がある暴力を尊崇し、勇を好み激しく争い、打ち殺す、命知らずの観念をすでに述べているのである。これは秘密結社の生来のまた顕著な性格の特徴と意識の傾向である。

秘密結社の力を持つて勇を尊ぶ観念およびその性格の形成には、中国民間の下層社会で勇力と勇徳に対して推し崇めることに淵源がある。

中国の古代社会では、勇徳を推し崇めることの由来はすでに久しく、古人には「智、仁、勇、この三者は天下の一般的な徳である」という言い方がある<sup>(31)</sup>。

孔子も「勇者は恐れず」これ君子の道であると言っている。しかし、異なる社会階層、異なる修養の立場と社会価値観は、勇に対して同じと認めるものがすこぶるその趣を異ならせている。個人の「内省」を重視する儒家は、身を修め家を斉え国を治め天下を平らぐという世に知られた論理によって、「恥を知るは勇に近きか」と主張する（『十三経注疏』）。「過ちを改めるをこれ勇と謂う」。もし過ちを知って「改めることができなければ、これ勇なきなり」。「兼愛」、「非攻」、「交利」を社会の理想を主張する墨子は以下のように言っている。「勇は、志の敢てする所以なり」と<sup>(32)</sup>。勇と考えられるのは、理想のために恐れることがないことであ

る。士大夫達が重視して高く評価する勇は、「私に克つ」、「己を責める」の「義理の勇」である。

下層社会はさらに勇の原始的な古風で素朴な意義——力に心惹かれ、勇をもつて力を尊ぶ道徳の対象とし、「力は山を抜き、気は世を蓋う」<sup>(33)</sup>式の強力な勇を評価し褒めたたえて、身に比類なき技を持ち、勇猛にして敵なく、山に登って虎を打ち、海にもぐって蛟を擒える好漢を尊び敬う。

荀子がかつて勇を上、中、下の三等に分けて表し、またその性質によって「犬や豚の勇」、「商人や盗人の勇」、「小人の勇」、「君子の勇」に区分し、社会の各階層の勇に対する異なる価値意識を多方面にわたってはっきりと示した。

上勇なるものあり、中勇なるものあり、下勇なるものあり。天下に中ありて、敢えてその身を直し、先王に道ありて、敢えてその意を行う。上は乱世の君に循がわず、下は乱世の民を欲さず。仁の在る所では貧窮無く、仁の亡き所では富貴無く、天下これを知れば、則ち天下と共にこれを樂しまんと欲し、天下これを知らざれば、則ちどつしりと天地の間に独立して畏れず、これ上勇なり。礼恭しくして意儉にし、信をつくして偽りなきことを大にして貨財を軽んず、賢者は敢えて推してこれを尚び、不肖者は敢えて援きてこれを廢す。これ中勇なり。身を軽んじて貨を重んじ、禍にやすんじて何とか弁解しいやしくも免れ、是非可否の実情を

かえりみずして人に勝つことを期するをもつて意と爲す。これ下勇なり。

犬や豚の勇なるものあり、商人や盗人の勇なるものあり、小人の勇なるものあり、士君子の勇なるものある。飲食を争い、廉恥なく、是非を知らずに、死傷を避けず、相手の数や強さを畏れず、物欲しげにただ飲食のみを見るは、これ犬や豚の勇なり。利益のために、財貨を争い、辞讓なく、果敢で激しく、猛烈に貪つて人に逆らい、物欲しげにただ利のみを見るは、これ商人や盗人の勇なり。死を軽んじて暴なるは、これ小人の勇なり。義の在る所にして權勢に傾かず、その利を顧みず、国を挙げてこれに与えりとも目移りせず、死を重んじて義を持して曲がらないのは、これ士君子の勇なり。

荀子はさらに下層社会の各職業の推し讃える勇徳を描写した。

高きに登りて危うきに臨みて目がくらまず足がふるえざるもの、これ大工の勇悍なり。深淵に入りて蛟龍を刺し鼈鼉（かめのかつ）を抱き出るもの、これ漁夫の勇悍なり。深山に入りて虎豹を刺して熊羆を抱いて出るもの、これ獵師の勇悍なり。頭を断ち腹を裂き、原野に骨をさらし血を流すことを難からぬもの、これ武夫の勇悍なり。

明らかに、荀子が言うところの「上勇」、「中勇」、「君子の勇」は、まさしく社会の主流が認めている「大勇」、「義理の勇」である。だが荀子の言うところの「下勇」、「大工・漁夫・獵師・武夫の勇」および「犬や豚の勇」、「商人や盗人の勇」、「小人の勇」は、下層社会の推し崇める勇徳を大體概括しており、下層社会に成長した秘密結社の勇は、この類のいわゆる「力を持つて徳を恃まず」の「血氣の勇」から来ている。

もとより、社会の下層に生活している秘密結社の成員が強力な勇に対して崇め尊ぶことは、かれらの動揺して安らかでなく、前途が予測できず、つぶさに辛苦をなめた体験と感覚、ならびにこれを基礎にしている必要性による選択の方向を體現している。かれらは武勇の力にあこがれ、立身を求め、自衛と暴力に抵抗する力を望み、およびこの種の力と相関係する人との間で互助を行う。

けれども、力を持つて勇ましく、意地になつて勝とうとし、金の利益のために死を軽んじ、生存のために暴力を行う觀念と習性は、さらに主要にはやはり秘密結社というきまりに制約されない組織が、常に略奪的な手段でもつて社会に対して要求する生存方式によつてしからしむ所による。

秘密結社中の人はみな飯を食わねばならないが、秘密結社はまた生産を行わないので、會員の衣食の術を解決するためには、社会に対して強奪を強行するほかに、別に他の

方法がない。したがって秘密結社が発生してから、種々の経済的略奪と不法な「収入を作り出す」活動が伴った。すなわち、三、四人または四、五人が群をなし、数十人がグループをつくり、盗んだり強奪し、横暴な行いをし、手をこまねいてもうけを奪い取り、その場で盗品を山分けしたり、百人、千人が仲間を組み、山を占領して王となり、密輸や阿片販売をし、誘拐して「身を処」し、売春婦を買ひ賭博を開帳し、人身を売り、言いがかりをつけて財物をゆすり取ったり強奪をする。すべての奪い合い・略奪・殴り合い・殺人などの違法な禁を犯し危険を冒すことは、みな凶暴を恣にして激しく競い争う暴力と命知らずの死を恐れない精神を抛り所に行っている。それ故、秘密結社の利益のために、「死傷を避けず」、「はなはだ強いことを畏れず」、「果敢にして残忍であり」、「死を軽んじ」、「頭を断ち腹を裂き、原野に骨をさらし血を流すことを難からない」野蛮人の勇が、自然と秘密結社中の人に崇め尊ばれる。かれらの観念の中では、激しく競い争いをし、むやみに突進し、勇敢に暴力を行使し、法律を畏れず、命をもてあそぶことを恐れず、首をはねることを「見てただ普通のこととし」、「いささかも警戒も畏れもしなく」てこそ、英雄であり、そうでなければ小熊であり、仲間に相手にされない。

民国年間に清幫、洪幫にまぎれこんだ鎮江の有名な向春亭の回想では以下のように言っている。「秘密結社の多くの

人が残忍な処を語るものであり、彼の残忍さを顯示しようとし、どんなことでもやり、何も顧慮せず、至る所で騒動を引き起こし、言いがかりをつけて財物をゆすり取り強奪をし、テラ銭を取って集まって賭博をし、喧嘩をし殴り合いをし、盗み食いをしスリをし、極端な場合には匪賊となつて「首領」となったり、妓楼の主人となつて売春婦を食物にしたりし、みな秘密結社の名義をかたり、秘密結社と関係する<sup>(五)</sup>。楊方益は「漫談清洪幫」という文の中でも以下のように述べている。一部の人は「秘密結社への入会は生活のため金もうけのためであり」、「もっぱら凶悪かつ横暴にし、強制的に取り立てをし、言いがかりをつけて財物をゆすり取り強奪を行う。彼らは他人より凶悪にしなければならぬ、そうでなければ他人に欺かれると考<sup>(六)</sup>えている」。これらの秘密結社の分子は暴力をもつてすべての問題を解決することを主張する。これによって、秘密結社は社会上暴力の成分が極めて重大である集団となっている。

秘密結社の暴力行為についての歴史的記載は極めて多い。たとえば道光・咸豐年間の広西省の天地会では、各山堂が群をなし隊を組み、「至る所で家を襲つてかすめ取り」、「勇ましく敏捷で闘いをよくし、非常に凶猛であり」、同時代の太平天国領袖はかつて『天情道理書』の中でかれらを譴責し、以下のように述べている。「その残酷な心を恣にし、その貪婪な志をたくましくし」、「したい放題に行動しはばか

るところがなく、人民を残酷に殺害し、婦女を強姦し、種々の情状は、名付けて言いにくい。清幫の早期の組織の中では、「民船に害を与え、横暴で騒動を起こす」、「私憤を持ち、互いに矛を持ち矢を放つて鬩い、殺傷者は多く、その凶暴頑迷さをたくましくし、したい放題に行動しはばかるところがない」、「競つて略奪を行い、住民に害を与え、民衆の衣服や物を強制的に取る」などの現象がありいづれもみな同じようである。

さらにたとえば光緒年間には、『蘇報』に「その会の中の人はいしばしば事件を引き起こし、……陰でその略奪の計を強要する」と哥老会を指して責める文が載った。貴州の革命団体「自治学社」の「貴州血淚通告書」でも以下のように述べている。「哥老会……放火殺人略奪誘拐の事の半ばはこの輩の中から出る」。

またたとえば清代の天津の「鍋匪」混混兒は、武力によって社会上では市価を支配し、手をこまねいて儲けを奪い取り、賭博場を開き、テラ銭を取り、道を阻んで税を取り、私的に錢炉を作った。もし不服な人がいれば、彼らは武力を用いて解決し、何人でも打ちのめし、相手がおとなしく服従しないのを恐れない。取った縄張りを前からのものとして、もし人に「境界を犯されたら」、苦しい鬩いを行うもやむを得ず、暴力を用いて問題を解決しなければならない。清の人楊一崑は『天津論』の中で以下のように記述している。

人がその境界を犯したなら、徒党を糾合して群を成して鬩う。鉄尺や斧、さおや鳥打ち銃が、母屋に駆けつけ、湯や煉瓦のかけらが下に落ちてきても、生死存亡を顧みるだろうか？

「混混兒」の喧嘩は、すべて「皮膚を刺されてもたわまず目を刺されても面をそらさず」という精神にもとづき、勇ましく真つ直ぐに進む。「人が刀を振り下ろしたら、胸をはだけて相向かい、斧で攻撃してきたら、頭で迎え、恐れていないことを示さなければならない」。

秘密結社の中では、力比べを競つて激しく鬩い死を恐れぬ勇が広く行われているだけでなく、苦痛を畏れない別の勇もすこぶる推挙され重んじられている。その具体的情況はまた自分を傷つけ苦しむことと人に鞭打ちされたり切り刻まれることの二つである。

前者はたとえば洪門に「三刀六個眼」の口語があり、「固執して争い、互いに乱すと、自己の決意を表すために、匕首を用いて自分の股に三つの刀を激しく突き通し、『三刀六個眼』をやつて、相手を気持ちよくさせる」。その他にかつて洪門の「大哥」であつた同盟会員周寒僧の回想によれば、秘密結社の人がもし結社の規則を犯せば、事情によつて三刀六個眼の刑を受ける者は、自分で手を下さねばならず、刀を持つて自分の太股に三刀を突き刺し、「好漢が法を犯せば、自ら自殺を行う」と大声で叫び、さらに声を出すこと

はできない。もし一声「アア」と叫べば、「価値のない」と見なされる。これは秘密結社内部では、好漢でないという意味であり、洪門内部では好漢であることを重視するのである。三刀を刺して声を出さない者を、刑を監視する武徒が好漢と言ひ、彼に代わつて刀傷の薬を包んで縛ることができる。彼はその後結社内で、さらに上昇する希望が持つことができ、「前途」がある。もし「価値がない」とされた者は、送り出されて、その後生命を守ることが難しい。門外の武徒はこの人が「価値がない」と解ると、彼を辺鄙な所に連れて行き、彼の生命を奪ひ、その後死体を籠の中に載せ、大きな石を一つ縛つて河の中に沈める。袍哥の内部で法を執行し刑を用いる時も「光棍が法を犯せば、自らを縛つて自殺する」ことを論及し、受刑者は死を畏れてはならず、「自らの急所を求め」なければならず、穴を掘つて自ら飛び込むか自殺する。これは「袍哥がやったことだけはじめをつける」と呼び、すなわち死も勇武でなければならず、正しくないようにやつてはならない。

秘密結社集団間の武器を持つての集団での争闘の中で、苦痛を畏れない勇を競争することも常に見ることである。たとえば、釘を打った板を転がったり、油の鍋をすくつたり、赤く焼けた鉄板の上を裸足で歩いたり等々である。誰かが相手方のすることができないことをできれば、相手を圧倒することができる。この種の伝承されている気風の及

ぶところ、ついに役所がこのやり方を借用し、秘密結社の利益を争奪中の手こずつた問題を処理した。同治年間、漢口の二つの地域の秘密結社が、埠頭を攻撃し地盤を争うために集団間の武器を持つての争闘を何度も行つた上で、役所に告訴した。漢口の代理知府陳慶煌がこの事件を審理した時に、武術練習用の鉄靴を赤く焼き、二つの結社の誰かが赤く焼けた靴を履いて三歩歩けば埠頭はその者の所有に帰すと定めた。その中の宝慶幫の一人の好漢が進んで困難なことに当たろうと申し出て、鉄の靴を履いて五歩歩いて地面に倒れ、埠頭はついに宝慶幫の所有に帰した。この種の荒唐無稽に思える判決を下す方式が、多年にわたつて大勢の人が争論し、集団間の武器を持つての争闘による死傷が甚だしく多かつた事件を、このように「平穩」にさせたが、まさしく秘密結社中の人の苦痛を畏れない勇を崇め尊ぶ觀念を利用したものだった。

打たれたり拷問を受けて耐えることの技量では、名高い北方の天津の混混児がやはり最も典型である。清の人孫静安の『棲霞閣野乘』で、混混児は「特に他の長所はないが、この種の苦痛に耐えることができ、人に鞭打ちされたり突き刺されたりすることを、平然と受け入れるのみである」。多くの混混児はこの打たれたり痛みに耐える技量により、他人への重要な押さえどころとし、これに借りて名をなし、地盤を占め、「無資本な商売」を争う。彼らの決まりによれ

ば、打たれても手向かいすることは許されず、声を出して痛いと言うことを許されず、「虚勢をはる」と慣習でいう。およそこの組織に参加する人は、必ず決まりを守らねばならず、もし打たれた時耐えられずに、口の中で「アア」の二字を言えば、相手方はすぐさま手を止めて、この人は「失敗した」と見なされる。たとえば相場を争い賭博場をかき回して、一人の混混児が単独で賭博場を騒がすと、通例により打たねければならない。この時一定の様式により入り口を遮り横に倒れるが、その目的は必ず打たれると思っており、道をあけて賭博場に代わって道を残しておくことはできず、そうでなければ胴元が口実を捜して、彼の本心は道を譲ることで、真に打たれに來たのではないという。打たれる時には、決して遮ってはならず、さらに口汚く罵倒しなければならぬ。それ以上打つと人命に関わる時になると、胴元は「手を止める、立派だ」と号令する。この時別の人がやって来て打たれた者の姓名、住所を聞き、大きな綿を用いて体を覆い、持ち上げていつて傷を治療し療養させ、賭博場は金や贈り物を送らなくてはならず、これを「打たなければ相知らない」という。その後人の仲介を経て、毎日賭博場から一、二百文の手当を送る。賭博場が一日中門を閉めず、風雨が阻みさえしなければ、多くの文銭を分け、自ら取りに來させたり人を派遣して送り、「拿掛銭」と名付けたり、混混児の切口では「拿毛鉋」と呼ぶ。

これよりこの人は准収入があると見なされ、安心して受け取ることができる。けれども、もし打たれた時、痛いとかぶと無駄に我慢したと見なされ、皮肉を言われるのみならず、自らは戻らねばならず、その上面子を失って戻ったので、さらに仲間から追い出され、混混児である資格を失わねばならない。

最も人の注目を引くことは、混混児が役人の刑を受けることについてである。一般に混混児が大勢で喧嘩をした後、死傷者を出したので、殴り合った双方が一部の人を差し出して役所に自首させて刑を受ける。法廷に行くというが、その実は混混児に男を上げる機会を与えるのである。これらの自首して替え玉になった者の多くは大勢で喧嘩をする前に、あらかじめ先に選んだり、自らすすんで困難な事に当たろうと申し出たり、くじ引きによって決まったものである。最初裁判官が出廷し審問し、双方がまず苦しい刑罰を受けねければならない。「この時法廷には見物するものがびつしりと集まるが、大部分のものはそれぞれの混混児であり、首領をはじめ、すべての名の売れた者、まだ名の売れていない者がみな見に來る。双方に関係する人がとりわけ非常に恐れるのは、自分の身内がその場で恥をかくことである」。よく吟味するだけの価値があることは、上は地方官から下は刑の執行役人まで、みな混混児の決まりによって事を行うことである。刑に耐えきれずに痛いと言を出し

た者は、「(一)県の役人がすぐさま彼を退け、その場で追い出す」。この時彼ははって法廷を出なければならず、廷外の大先輩各自が彼の足を蹴り続け、役所の外に蹴り出す。この人はすべてを台無しにし、仲間と同列にされず、別の生活をし、汚点は生涯すぎがたい。拷問を受けて耐えた者が、「法廷を出ると、見ていた人みなが親指を上げて賞賛し」、一間に送られ休養すると、「すぐさま人が金、米、菓子、新鮮な物、調理済みの副食品を送り、次々とすべてが揃う。金や貼り札が枕元を塞ぎ、物が山積みとなる」。刑の執行役人や下つ端役人ですらご機嫌伺いに來て世話をし、医者に傷の治療を乞う。これにより名の売れた混混児が、将来売春宿を開き、賭博場を設けると、どうして恭しくされないことがあるか。

自ら傷つけ苦しみ、打たれたり拷問にあつて耐えることの類の勇は、すでに味わいを変え、力を尊ぶ勇が内包しているものと甚だしく異なっているが、その実質は「苦痛を畏れない方式を通じて、力比べをしては得られない勝算を得る」ことにある。

要するに、結社の世を騒がすのに、「勇」の字は欠かせなく、これは秘密結社内の普遍的な、共通な道德の原則と行為の準則であり、秘密結社の生存哲学である。たとえば秘密結社の「勇」が凶悪擻猛で残忍暴虐で、もっぱら私利を図るものであり、無頼の気が十分であるとしても、その品性

を充たすのは、匹夫の勇、無法者の勇に過ぎないのである。

「義を結んで、徒党を組む」仲間意識、「義」を核心とする秘密結社の倫理、「結社内では師に従う」信条、きまりに制約されない社会心理、命知らずで激しく争う勇を尊ぶ觀念は、秘密結社の意識の全体構造を構成している。無論、論者はなお秘密結社に關係する記載の中から政治意識と宗教意識を析出することができるが、それらはみな秘密結社の意識の実質的構成物となるには十分ではない。政治意識について言うと、秘密結社は別に終始政治目標を持つてないのではなく、相反して、政治的風潮の中では、それは自己を中心とする政治的投機性をさらに多く表している。宗教意識について言うと、秘密結社は迷信を信じ多様な神々を祭り拝むが、その行為の準則、価値觀念はみな社会に根源があり、宗教と少しも關係がない。それ故秘密結社の政治意識と宗教意識は、この文章の論述の範囲外である。

### 原註

(1) 『軍機処録副奏摺』咸豐元年七月二一日給事中黃兆麟奏摺暨片。

(2) 『軍錄』福建巡撫汪志尹摺、嘉慶三年十一月一四日。

(3) 『朱摺』閩浙總督程祖洛摺、道光一五年十一月一七日。

(4) 崔錫麟「我所知道的清洪幫」(『幫会奇觀』中国文史出版社、一九八九年)、四四頁。

- 〈5〉『朱摺』貴州巡撫裕泰摺、道光十六年正月二十四日。
- 〈6〉閔鍾九「洪幫在甘肅」〔近代中国幫会内幕〕下卷、群衆出版社、一九九二年、一一二頁。
- 〈7〉陶成章「教会源流考」〔近代秘密社会史料〕岳麓書社、一九八六年、二二〇頁。
- 〈8〉楊兆蓉「辛亥革命四川回憶錄」〔近代史資料〕一九五八年第二期、二九—三〇頁。
- 〈9〉樊松甫「我所知道的洪門史実」〔前掲『幫会奇觀』所収〕、一二頁。
- 〈10〉胡適「中国古代哲学史」商務印書館、一九二九年、第六編第二章。
- 〈11〉高亨「商君書注詁」中華書局、一九七四年、一四四頁。
- 〈12〉陳奇猷「韓非子集解」卷六、解老。
- 〈13〉李然犀「天津的混混兒」〔前掲『幫会奇觀』所収〕、三七頁。
- 〈14〉『清季教案史料』卷一。
- 〈15〉王闓瞻「二八七〇年天津教案」を見よ。
- 〈16〉『天地会』(一)、中国人民大学出版社、一九八〇年、一六一—一六二頁。
- 〈17〉原文は、中国第一歴史檔案館に所蔵されている。
- 〈18〉原文は、中国第一歴史檔案館に所蔵されている。
- 〈19〉張風雲整理「清幫『炉香証書』の様式及内容」〔近代中国幫会内幕〕上巻、群衆出版社、一九九二年、六三—二頁。
- 〈20〉陳国屏「清門考源」河北人民出版社、一九九〇年影印本、一五九頁。
- 〈21〉朱琳「洪門志」河北人民出版社、一九九〇年影印本、一七〇頁。
- 〈22〉衛聚賢「中国幫会」、河北人民出版社、一九九〇年影印本、三八頁。
- 〈23〉李世瑜輯「天津市脚行資料」二八頁。
- 〈24〉『林則徐集』奏稿四、奏稿五、中華書局、一九六五年、一九頁、三一二頁。
- 〈25〉張壽鏞「清朝掌故匯編內編」卷五四、刑法一。
- 〈26〉山口昇「中国的形勢及秘密結社」〔近代史資料〕總七五号、社会科学出版社、一九八九年、二二五頁。
- 〈27〉周声遠「我所知道的幫会情况」〔近代中国幫会内幕〕上巻、群衆出版社、一九九二年、二〇九頁。
- 〈28〉中国第二歴史檔案館編『民国幫会要録』檔案出版社、一九九三年、二五七頁。
- 〈29〉肅一山「近代秘密社会史料」岳麓書房、一九八六年、二二〇頁。
- 〈30〉林則徐「籌議約束漕船水手章程摺」〔林則徐集〕奏稿五、中華書局、一九六五年、三一二頁。
- 〈31〉『史記』中華書局、一九五九年、二九五—二頁。
- 〈32〉韓愈「五箴並序」〔全唐文〕卷五五七。
- 〈33〉孫詒讓「墨子問詁」卷一一。
- 〈34〉『荀子新注』中華書局、一九七九年、四〇—一四〇二頁、三九頁。
- 〈35〉楊方益整理「向春亭談清洪幫」〔前掲『幫会奇觀』所収〕、九九頁。



- (36) 楊方益「漫談清洪幫」(前掲『幫会奇観』所収)、九六頁。  
 (37) 『大清会典』卷一三「漕運」、「畿輔通志」卷二を見よ。  
 (38) 『蘇報』一九〇三年五月八日「客民篇」を見よ。  
 (39) 『雲南貴州辛亥革命資料』科学出版社、一九五九年、二一四頁。  
 (40) 張叢「津門雜記」卷下より引用(天津古籍出版社、一九八六年)。  
 (41) 周寒僧「我所知道的江西洪江会」(前掲『幫会奇観』所収)、一三〇頁。  
 (42) 『武漢文史資料』第一五輯。  
 (43) 李然犀「天津的混混兒」(前掲『幫会奇観』所収)、三三—三五頁。  
 訳註

- (1) 秘密結社内での権力者、親分、頭目。  
 (2) 哥老会や天地会の別称である洪門は洪(紅)幫、また清幫は青幫と表記することもある。著者は後の記述で、清幫と青幫を併用し、また洪門と洪幫、天地会、哥老会などを併用しているが、表記は著者の用法にしたがった。  
 (3) 入門儀礼に参加する本師、伝道、引進の三幫の頭、さらに三幫それぞれの師太(師の祖)、師爺(師の師)、師傳(師)の三代、計九代を指す。ここではそれぞれの人物の名前のことを言っているものと思われる。  
 (4) 哥老会や天地会の末端の個々の組織では、語尾に山や堂とつくものが多かった。ここではこのような各秘密結社

の末端の個々の組織のこと。

- (5) 青幫の成員が乗っている船。  
 (6) 青幫の派閥を指導する主人の意。  
 (7) 羊角哀と左伯桃は、戦国時代燕の人であり、友人であった。楚王に仕えようとして、途中雨や雪に遭い、二人が生き残るのが不可能なことを知って、左伯桃がすべての衣糧を羊角哀に与え、自らは死んだ。  
 (8) 単雄信は隋末から唐初に活躍し、最初隋に反乱を起こした李密の反乱軍に参加し、その後王世充の反乱軍に降つてそれに参加した。秦瓊は唐の秦王李世民(後の太宗)に従つて王世充軍を破つた。  
 (9) 哥老会の別称。  
 (10) 黄金榮は、杜月笙、張嘯林とともに、一九二〇年代から三〇年代にかけての上海青幫の三大親分である。  
 (11) 金蘭は金蘭譜といい、義兄弟になる時に、祖先三代の履歴や氏名および本人の生年月日などをこれに記して交換することが多い。  
 (12) 読み下しは『易经』丸山松幸訳(徳間書店、一九七〇年)四三頁による。  
 (13) 北方の民間で行われる口語による語りと謡いを織りまぜた芸能。  
 (14) 兄弟の世代・長幼の序列。  
 (15) 秘密結社の祖師などが祭られている建物のこと。  
 (16) 入会者に青幫のしきたりを教える人物。  
 (17) 青幫の祖師である翁祖、銭祖、潘祖と朱少祖、黄少祖、

劉少祖、石少祖を指す。

(18) 仏教でひざまずいて額を受礼者の足につけること。

(19) 皇帝や高官に会う時や孔子の靈位を拝する時、両膝でひざまずいて三拝し、立ち上がってまた前の動作をくり返し、合計三度ひざまずいて九回拝する礼。

(20) 青幫の入会者が入会後に弟子入りする師父。

(21) それぞれの字によって決まる世代の長幼の序列。羅教の影響を受けた青幫の前二四字輩は、「清静道德、文成仏法、人倫智慧、本来自信、元明興礼、大通悟覚」の順序になる。黄金榮、張嘯林は、通字輩であり、杜月笙は悟字輩であった。

(22) 労働者の親方。

(23) 皇帝が高位高官の者の曾祖父母・祖父母・父母・妻などに恩典を与えるのを封といい、それらの者が個人である時には贈というのが、本来の意味であるが、そのように上の者が下の者に恩典を与えるという意味で使用されていると思われる。

(24) 元曲で物語の本筋となつて四つの折(芝居的一幕)の前、あるいは間にはさまっている軽い一幕。

(25) 科擧の最高の試験である殿試で第一位の成績で進士となった者。

(26) 清代、都察院の六科給事中および十五道の監察御使をいう。

(27) 勇猛で鳴らした項羽の詩。

(28) 著者は荀子の文章としているが、正しくは劉向『說苑』

の文章である。この文章の出典、『說苑』の訳については内山俊彦先生の御教示を受けた。

(29) 鉄製の武器。

\*本文中の(一)は著者の記したものであるが、(一)は訳者が補ったものである。

\*『荀子』の訳については、『荀子』(上)(下)金谷治訳注、岩波書店、一九九七年を参照した。

(邦訳 馬場毅)